

What is communication? What should we do?

文／荒尾貴正(本誌編集デスク)

コミュニケーションとは何か？ 私たちはどうしてこうすべきか？

01

平田オリザが語る 「コミュニケーションと教育」

「コミュニケーションの問題は
自己中心的に考えやすい」

現在、日本のみならず、国際的に求められているコミュニケーション能力は、「異文化コミュニケーション能力」「異文化理解能力」といわれています。異なる文化や価値観をもった人とも、対等な立場から意見を言い合えるような能力です。それを求められる場面は、身近なところにもたくさんあります。

例えば、高校生に近いところで言えば、就職先の会社。「昨夜は勝って良かったな！」といきなり話しかけてくるおじさんたちのプロ野球の話題についていけるか。職場に溶け込めるかどうかという点で、これ

は決して小さな問題ではありません。「世代間」という異文化の問題です。あるいは、製造業の現場に関しては、従来は少なかった女性が増えました。そこには「ジェンダー」という異文化もあるでしょう。

かつて製造業では、「無口な職人」はプラスのイメージでした。それがいつの間にか、無口では就職が困難な世の中になりました。これをもつて「かわいそう」「社会がおかしい」と考えることもできます。しかし、そうとは言い切れないところが、コミュニケーションの問題の多面的なところであり、難しさと言えます。

というのも、かつて「無口な職人」が認められたのは「男性中心」で「年功序列」の世界だったから、ほとんどしゃべらなくて

もよかったという面がありました。けれども今、現場にいる若い女性や外国人にとって、「無口な職人は「怖い」と見られかねない存在です。「無口な職人」の職場にそうした社会的弱者が入ってきた場合、「無口な職人」は既得権益者、つまり相対的には社会的強者となるのです。だとすれば、「無口な職人」であっても、お茶を入れてもらったら「ありがとう」と言葉を返すくらいの気遣いは必要なのでしょう。

「コミュニケーションの問題は、誰もが自己中心的に考えやすく、自らのコミュニケーション観を他人に押し付けがちになるという危険性ははらんでいます。言語に備わる本質的な問題ですが、こうした点は常に意識すべきだと思います。」

劇作家・演出家
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授
平田オリザ氏

ひらた・おりざ●1962年生まれ。16歳で高校を休学し、1年半をかけて自転車による世界一周旅行を敢行。帰国後、大学入学資格検定試験を経て国際基督教大学に入学。在学中に劇団「青年団」を結成。1995年、『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞を受賞。『わかりあえないことから～コミュニケーション能力とは何か』など、コミュニケーションに関する著作が多い。



撮影／中岡邦夫

PISSAが求める 異文化理解能力

異文化コミュニケーション能力と呼ばれるような力が、これからの日本でますます求められていく最大の要因は、少子化問題です。これは労働力問題と言い換えることができます。経済を支えるために不可欠な労働人口の不足をどう補うか。現実には、海外から人々を受け入れ、その労働力に頼る以外にありません。日本ではこれまで外国人の比率はとても低く抑えられてきましたが、もう続きません。30年後には、おそらく日本の全人口の1割〜2割が外国からの移住者で構成されるようになるでしょう。「多文化共生社会」は目の前です。ゆえに、文化や宗教の異なる国から来る人々とうまくやっていけるようなコミュニケーションの力が、私たち全員に必要になっていくのです。

「PISSA」という国際学習到達度調査をこなすの先生も多いでしょう。なぜわざわざ、OECD（経済協力開発機構）という経済の専門機関がPISSAを行うのか。それは世界が、「多文化共生」というルールに則って動く社会に変わりつつあることを意味しています。多文化共生とは、企業、学校、自治体、国家など、およそどんな組織でも、異なる文化や価値観、宗教をもった人々が混在したほうが、最初はちよつと面倒くさくて大変だけれども、最終的には高いパフォーマンスを示すという考

え方のこと。その、「最初はちよつと大変」という部分を、何とか各国が教育によって乗り越えていきたいと思います。それがPISSAの最大の眼目だと考えられます。

過去のPISSAでは「落書き問題」と称される問題が出され、話題になりました。日本では、落書きは悪いに決まっています。文化や国家体制が違えば許される局面もあることをこの問題は問いかけています。例えば、独裁国家のなかで命がけで壁に書かれた落書き。それしか表現手段のない人々にも思いをはせるといふ能力こそが、PISSAが求める異文化理解能力の本質です。

コミュニケーション教育は 人格教育ではない

日本人はコミュニケーション能力が低いと思う方がいるかもしれませんが、それは違うと思います。日本独特の「コミュニケーション文化」を、私は「わかり合う文化」「察し合う文化」と呼んでいます。

柿くへは 鐘が鳴るなり 法隆寺
という句を聞いただけで、多くの人が夕暮れの斑鳩の里を思い浮かべる。これは大変な能力でしょう。

かたや欧米の文化を、私は「説明し合う文化」と呼んでいます。ヨーロッパは陸続きで隣り合っているために、自分の考えや能力を他者にきちんと説明できなければ無能の烙印を押されるような社会を形成し

てきました。日本の文化と欧米の文化とを比べて、どちらが正しいとか、優れているということはできません。

ただ、国際社会のなかでは、私たちは「少数派」であるという自覚をもつ必要があると思います。今後、多数派に合わせなければならぬ場面も多々出てくるでしょう。それに向けて私たちは、多数派の「コミュニケーション」を「マナー」や「スキル」として学ばなければなりません。コミュニケーション教育は人格教育ではありません。マナーやスキルとして身につけられるものと、まずは先生方がとらえることが大切です。

ではなぜ学校教育のなかで、コミュニケーション教育や言語活動をすべきなのでしょう。そんなものは、昔は現場で学んだもんですけれどね」と悪気なく仰る先生もいます。その「現場」とは、いったいどこにあるのでしょうか？

従来型の上意下達のコミュニケーションであれば、それを学べる現場もあるでしょう。しかし今求められているのは、対等な人間関係のなかで、いかに合意形成をしていくかといった能力です。これは現場ではなく、学校教育のなかで体系的に身につけるものだと思います。

また、どうしても現場で経験できないこともあります。例えば今、医学部の学生のなかには、医師になるまで身近な人の死を一度も経験したことがないという人が珍しくありません。そういう人が医師になることは、一般市民からすれば不安なことかも

しれません。かといって、その学生に向かって、「とつとつと経験してこい！」などと言えどでしょうか？ そういう場合には、シミュレーションのようなことなど、学校ならば何らかの機会を提供できるでしょう。

すなわち、社会が変わってしまったのです。かつては家庭や企業や地域社会で学べたかもしれないことが、今は困難になりました。そうだったのは大人たちのせいであつて、子どもたちのせいではありません。だから大人の責任として、どこかで補わなければならない。それが学校教育の新しい役割のひとつになったと考えるべきではないでしょうか。

伝えたい気持ちは 伝わらない経験から生まれる

これまでもコミュニケーション教育の名のもとに、スピーチやディベートなどの取り組みがなされてきました。それぞれに意味があると思いますが、そういった「伝える技術」を教えこむとしても、「伝えたい」という気持ちや子ども側の側にならないならば、技術の定着は難しいと思います。

その「伝えたい」という気持ちがどこから来るのかといえは、それは「伝わらない」という経験からだと思います。今の子どもたちに決定的に不足しているのは、この「伝わらない」経験です。コミュニケーション教育の問題も、おそろしくここに集約されると思います。では、どうすればいいのでしょうか？

「一番良いのは、体験活動だと思えます。障がい者施設や高齢者施設を訪問したり、企業でインターンシップを体験したり、外国人とコミュニケーションをとる機会を増やしていく。自分と価値観やライフスタイルの違う「他者」と接触する機会をシャワーを浴びるように増やし、なかなか「伝わらない」という経験のなかで、たまに「伝わる」喜びも味わえたら良いでしょう。ただし、これらの体験にはさまざまな制約もあります。そこで、「演劇」を用いた教育の役割が出てきます。

演劇は、常に他者を演じることができません。異文化や他者への接触を、フィクションの力を借りてシミュレート（疑似体験）

することが可能です。この点が欧米において、異文化コミュニケーション教育の中心に演劇がずっと位置してきた理由だと考えられます。

わが国では2010年度から、「コミュニケーション教育推進事業」という名で俳優や演出家、ダンサーなどが学校現場に入り、教育に協力する活動が全国で広がっています。年間約2億円の予算で、全国約400校の小・中・高校が活用しています。

ただ、韓国やシンガポールはもっと大きな予算をつけた施策を開始しており、アジアのなかでも日本はかなり遅れをとっているのが現状です。

早期離職者を出さないために 学校ができること

就職しても早々に会社を辞めてしまっ若者がいます。「自分に合った仕事じゃなかったから」という人がそのなかには多くいます。そういう人は、「会社は変わらないもの」と最初から決めつけているようです。「会社は変わらないもの」だから、「全部自分が合わせなければならぬ」。でも「それは嫌」。なので「辞める」。私は、この考え方は間違っていると思います。学生には次のような話をします。

確かに君たち個人に比べて、企業は大きい。でも、君たちの入社する会社の部署の

最小単位は、おそらく10人程度。10人の共同体に1人が入るということは、生命にしたら10%の細胞が変わるといふこと。すると、相手も確実に変わるのです。相手も変わるんだけど、それが君たちには見えにくいだけだと思う。

つまり今の若者は、相手が「変わる」という感覚をもちつらくなっているようなのです。生まれてこの方ずっと停滞している日本を見てきたということが、一番大きな理由かもしれません。しかしここには、教育が果たすべき役割もあると思います。自分も変わるし、相手も変わる。そのような感覚は、コミュニケーション教育のなかでも十分に身につけることができるのです(談)。

02

ビジネス、科学技術、医療… 社会の主要分野で今求められること

口下手な営業マンのほうが よく売れるという現実

日本経済団体連合会(経団連)の調査によれば、企業が採用時に重視する要素の第1位は、9年連続で「コミュニケーション能力」となった。企業の数ある職種の間でも、とりわけ高度な話術やプレゼンテーション能力が求められるようなのは、商品

売る「営業」ではないだろうか。ところが実際に、そうともいえないようだ。

「しゃべらない営業」の技術」という著書のある渡瀬謙氏は、小・中・高校と貫して、クラスで最も無口な子どもだった。一人であるのが好きで、極度のあがり症でもある。大学卒業後にメーカーに入社し、その後、株式会社に転職。自分らしい営業スタイルを貫き、営業達成率全国トップの

営業マンとなった。そして現在は「サイレントセールストレーナー」として営業職教育に携わっている。なぜ内向的な性格のまま、高い業績を上げられたのだろうか。

「営業は私のように、たとえどしくボソボソとしゃべるタイプのほうが売れるのです。ここ数年さまざまな企業のトップ営業マンとお会いするなかで、それを確信しました。私の印象では、豪快で明るいタイプ

よりも、おとなしくて線の細いタイプの人のほうが多かったのです」

おしゃべりで、明るく、元気な営業が売れていた時代もあった。しかし、環境が大きく変わり、そういうタイプの営業は厳しくなった。渡瀬氏によれば、次の3つの環境変化が今起きているという。

① 営業マンに対する不信感が募っている
お客さまが増えている



サイレント セールストレーナー
渡瀬 謙氏

② 欲しいモノがない、少ないというお客さまが増えている

③ インターネットで選んだり、買ったりするお客さまが増えている

ビジネスとは

「普通の人つきあい」

では営業職は、どうすれば商品を売る
ことができるのだろうか？

「営業は、『テクニク』や『粘り』が重要と思われがちですが、それは違います。営業とは、『普通の人つきあい』です。目の前の人とどうやって信頼関係を築くかという考え方をしなければ、商品も売れません。私が営業職の指導をする際には、『お客さまの前では、できるだけ仮面を脱ぎなさい』と言っています。演技をしても意味がないし、うそをついては絶対にダメです」

このような主張を裏書きするように、これまで「粘り」「根性」の営業で業績を伸ばしてきた大手企業が、業績不振を理由に「粘らない」「しゃべらない」営業に方針転換するケースが増えている。書店に並ぶ営

業ノウハウ本の傾向も変わり、「説得しない」「お願いしない」方向に変わってきた。

以上に述べたように、営業職はしゃべることがうまくなくても、むしろ口下手のほうに向いていると言えるかもしれない。営業以外の職種はどうなのだろうか？

「営業職以外にも、私は基本的に同じと考えています。ビジネスは社内でも社外でも、人との信頼関係という側面がとて大きくて、『普通の人つきあい』であることに変わりありません。スキルやテクニクではなく、いかに本音でしゃべれる関係性になるかが重要だと思っています」

ビジネス全般においては「テクニクの」なコミュニケーション能力よりも、お互いの「信頼感」を醸成できるような、よりベシツクなコミュニケーションのあり方が求められると言えそうです。

渡瀬氏から最後に、どうしても伝えたいことがあるという。

「私は高校まで、先生から『明るくなれ』と言われて続けてきました。今となれば、良かれと思って言ってくれたとわかりますが、当時は、そうできない自分はダメな人間という劣等感ばかり募りました。内気なのは『悪』ではない、それは『個性』である、ぜひ認めていただきたいですね」

科学が人を幸福にする カギはコミュニケーション

科学技術の分野で「コミュニケーション」

の重要性を強く主張する大学がある。国立の電気通信大学だ。

同大学は「総合コミュニケーション科学」の確立を目指している。人々が心豊かに、生きがいをもって暮らせる社会とは、「コミュニケーション」あふれる社会である。そんな信念のもと、人と人の間のコミュニケーションだけでなく、人と自然、人と社会、人と人、工物との間にもコミュニケーションが存在すると考え、それを大切にする社会を実現していきたいという。梶谷誠学長は、次のように思いを語る。

「科学技術が真に人々の役に立つものになるかどうかは、コミュニケーションにかかっていると考えられています。環境問題にしても、原発事故の問題にしても、現代社会の問題は大変複雑なため、異なる立場の人々が協働して事に当たらなければ解決できません。工学の専門家がその立場だけからものを語り、法律の専門家がその立場だけからものを語る。各々の立場を守るといった点からは当然のようにも思われますが、それでは全体を見る視点がなく、解決の糸口はなかなかみつかりません。お互いにコミュニケーションを取り合いながら全体を見よう、総合的に判断しようというのが、『総合コミュニケーション科学』の要諦です」

商品開発に関しても、人と機械との間のコミュニケーションがうまく取れば、それはヒット商品になるという。「その好例は、タブレット端末でしょう。人

の立場に立ってハードとソフトをデザインしたことが人々の心をとらえ、大ヒットに結びつきました。良くない例は、家電のリモコン。あれだけボタンが多いと使うほうは迷います。ユーザーの視点を入れず、機能を多く盛り込みさえすればよいという技術者の一方的な思い込みだけで開発してしまつたように映ります」

電気通信大学としては、実践的な技術者教育を行いながら、そのなかで豊富なコミュニケーションの機会を設け、どんな立場の人とも協力、連携できるような技術者や研究者を育てていきたいという。

「これまで科学技術の世界では、『職人』として生きる道がありました。しかしその道は、非常に少なくなりました。だからこれからは技術を身につけるだけでなく、全体を見渡し、まとも上げる力もあつたほうが、学生のためにも望ましい。国にとつても、日本の技術は十分、世界に誇れるレベルにありますから、さらに「コミュニケーション」の力を随所に発揮できるように、また新たに生み出すことも決して夢では



電気通信大学 学長
梶谷 誠氏

医療分野で求められるコミュニケーション能力

—理系秀才が医療系学部で路頭に迷わないために—



慶應義塾大学 看護医療学部 教授

杉本なおみ氏

すぎもと・なおみ ●国際基督教大学教養学部語学科卒。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校スピーチコミュニケーション学科(現コミュニケーション学科)修士・博士課程修了。2005年より現職。医療コミュニケーションに関する多くの著作がある。

「今日の発表でパソコンを使わせてください。ダメと言われてもボクが困るので言わないでください。お願いします」

ある朝、こんなメールが学生から送られてきました。このようにはっきりと物を言う人を、コミュニケーション学では「直情径行型」*と呼びます。思ったことをそのまま口にするのが最善のコミュニケーションと信じているタイプです。

★

この直情径行君は、まず「パソコンを使いたい」という意図を、そのまま言葉にして教員に伝えます。そして「ダメと言われてもボクが困るので…」と、かなり直接的なひとことを付け足します。

これに対し、「あらまあいぶんお偉くなったこと」と、教員が皮肉交じりの返事をしたとします。直情径行君は、曖昧な発言を解釈するのが苦手です。そこで「先生の言っていることが意味不明だったので、仕方がないからパソコン『あり』と『なし』の両方を準備しました」といった反応をして周囲を驚かせたりします。

高校の先生方向けの講習会で、このような直情径行型の高校生が増えているという話をよく聞きます。日常生活のあらゆる場面で利便性が向上し、電子機器が私たちの意図を飲み取り、先回りして欲求をかなえてくれる時代です。光の届かない深海にすむ魚の目が退化するように、現代に生きる子どもたちから、自分の意図を適切に表出する機能が失われつつあるのかもしれない。

医療系の学部でも直情径行型の学生が増殖中です。曖昧さを苦手とするこのタイプは、「唯一絶対の解」を求めて理数系科目に惹かれること

が多く、その極みとして医療系を志望します。また高校側も、社会要請上「経済学部より医学部」「心理学科より看護学科」というように、医療系の進路を勧めがちです。

しかし実際のところ、直情径行型の学生は医師や看護師などの職種には不向きです。白黒はっきりした理系のイメージとは裏腹に、唯一絶対の解など存在し得ない世界で、不確実性との対峙を常に迫られるからです。

まず、患者の脈絡のない話から、治療に必要な情報をどうにか引き出さなければなりません。そのためには、他愛ない世間話をしたり、病歴や家族構成のような話しづらいことを聞き出したりする力が求められます。

また、誰かと話しながら、同時にそれとは違うことを頭の中で考える能力も必要です。患者の訴えに耳を傾けつつ診断名や治療薬のことを考えたり、処置をしつつほかの人に指示したりといった離れ業をこなさなければなりません。

さらに、グループで協働する能力も不可欠です。医療の高度化に伴い、複数の職種が協力しなければ解決できない問題が増えてきました。教育歴や価値観の異なる他医療職と、違いを乗り越えて協力し、患者一人ひとりの事情に即した最善策を模索する根気強さや柔軟性が何より重要です。

医療系を志望する生徒の進路相談の際には、成績だけでなく、このような資質の見極めが肝要です。「経済学部を出ても商学部を出ても銀行員になれる」非医療系学部とは異なり、医療系の場合、卒業後の職業は入学と同時に決まってしまう。臨床検査技師や臨床工学技士、診療情報管理士など、医療系の職種は医師・看護師以外にも多数存在しますので、選択の幅を広げることで入学後の不適応を防ぐことができます。

★

希望を胸に入学した医療系学部で、今年も直情径行君がまた一人、学習困難に陥り、進路変更を迫られています。「高校時代は数学と物理が学年トップだったのにもったいない」と思われるかもしれませんが、どうかダメと言わないでください。ボクだけでなく、ボクが将来診ることになる患者も困るので…お願いします。

*杉本なおみ(2013年)『改訂 医療者のためのコミュニケーション入門』精神看護出版

安全、安心な医療には、正しい情報伝達や、医療者と患者の間の信頼関係が重要だ。「院内暴力」や「院内トラブル」といったものも、多くはコミュニケーション不足が原因とされる。「チーム医療」というかたちで複数の専門家が協働して医療にあたるにも、良好なコミュニケーションは欠かせない。そうした医療分野のコミュニケーションについて、この分野の著書も多い、慶應義塾大学看護医療学部杉本なおみ教授に寄稿していただいた。医療系学部への進路指導についてもアドバイスをもらった。ぜひ参考にしてください(コラム参照)。

今注目の 医療コミュニケーション

東日本大震災および原発事故を経て、国も科学技術を取り巻くさまざまなコミュニケーションシナジーの存在を認め、その解消のために「科学コミュニケーションセンター」を設置した。また、科学コミュニケーションを研究する大学院も増えている。これまでコミュニケーションとは無縁のように思われた科学技術の世界にも、確実に変化が訪れている。

03

高校教師から高校教師へのメッセージ 私たちがこれからやっていくべきこと

日本人に欠けている 国際標準の「技術」

「『単語』のみで会話をする高校生がいま
す。けれどもそれは、小学校1年生が『先
生、トイレ』と言っているのと同じことなん
ですよ。大人たちが要求していけば、生
徒の力を引き出せるんです」

そう語るのは、千葉県松戸市立松戸高
校の岡本小枝先生。岡本先生は高校に赴
任して、「先生、プリント」と単語のみで話
しかけてくる生徒が多いことに驚いた。そ
こで事あるごとに、「単語ではなく、きちん
と文章にしましょう」と言い続けた。する
と、生徒は誰ひとりとして単語で言ってい
なくなつた。教師が辛抱強く求めていけ
ば、生徒は変わっていくのだ。



千葉県松戸市立松戸高校
岡本小枝先生

岡本先生は、中学教師時代にも同じよ
うな体験をしているが、それはもう少し大
がかりなわけによるものだ。松戸市は2
011年度より、小学校と中学校で「言語
活用科」を実施している。その元になる活
動を中学でいち早くスタートさせたのが
岡本先生である。

言語活用科とは、「論理的・批判的思考
力やコミュニケーション能力を身につけ、グ
ローバル化する社会で活躍できる児童生
徒」の育成を目指した教科。「自分の意見
をわかりやすく伝える」「相手が伝えよう
としていることを理解する」という目標の
もと、日本語分野と英語分野について、コ
ミュニケーションのさまざまな知識や技能
を学んでいく。

岡本先生がこの活動に取り組み始める
源流となつたのは、企業で海外勤務をして
いた時。多くの外国人と共にビジネスを
展開していたが、何かが違うという感覚を
もった。英語力が足りないのだとその時は
思った。その後、中学の教師になった時、そ
のからくりがわかった。

「欧米では論理的思考や相手にわかりや
すい表現方法の基礎となる技術を小学

校段階から体系的に学んでいくのです。
その土台の上に語学力があり、ビジネス
会話の基礎にもなっている。それを知り愕
然としました。日本人はこれを学ばなけ
れば、国際社会でもずっと土俵の外に
ことになるのだと痛感しました」

その衝撃が発端となり、言語活用科を
誕生させるエネルギーとなつた。
中学校で授業を行っていくと、成果は
徐々に表れた。例えば生徒指導。「ものご
との『事実』と『意見』を分けて考えましょ
う」という授業によつて、トラブルを回避で
きる生徒が増えた。高校入試の面接にも
効果があつた。「志望理由は3つあります。
1つは〜」という具合に、授業で学んだと
おりに話せるようになった。日常生活のさ
まざまな場面で生徒の成長を感じるこ
とができたという。

「言葉」という翼をどのように動かすの
かという『技術』を生徒が学び、どこまで
も自由に飛翔してもらいたい。それが私の
願いです」

現在は中学校の現場を離れ、市立松戸
高校の教壇に立つ。今後は高校での言語
力育成に力を入れていくつもりだという。

コミュニケーション教育推進会議が 定義する「コミュニケーション能力」

コミュニケーション教育推進会議による審議経過報告
(2011年8月29日)のなかで、コミュニケーション能力を次
のようにとらえている。

「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団におい
て、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワ
ークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題に
ついて、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考
えを伝え、深め合い、合意形成・課題解決する能力」

すなわちこれは、「異文化コミュニケーション能力」「異
文化理解能力」の重要性をうたっていると言える。多文化
共生時代の21世紀においては、このコミュニケーション
能力を育むことがきわめて重要であるという指摘だ。

新学習指導要領で求められる 各教科における「言語活動」

新学習指導要領のなかで、あらためて「言語活動の充実」が求められて
いる。言語活動とは、例えば次のようなことである。

- 考えを深める場面：ホワイトボードを使って話し合う、付箋を使って話し
合う、ペアで意見を交換する、など
- 発表の場面：立場を決めて討論する、製作物を使って発表する、生徒
が説明する、など
- 書く場面：ICTを活用する、新聞にまとめる、レポートにまとめる、など

ただし、「言語活動を充実すること自体が目的ではなく、言語活動により、
各教科・科目などの目標に則し、基礎的・基本的な知識及び技能の修得、これ
らを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その
他の能力を育むことを目指すことに留意する必要がある」(言語活動の充実
に関する指導事例集)としている。



三重県立飯野高校定時制課程
進路指導主事
鈴木建生先生

「コミュニケーションとは分かち合うこと」

三重県立飯野高校定時制課程 進路指導主事の鈴木建生先生は、生徒を「一人も見捨てない」という信念のもと、これまでにカウンセリングやコーチング、協同学習などあらゆるコミュニケーションメソッドを学び、教育に取り入れてきた「コミュニケーションの達人」とも言える人物。生徒とつながるためには新しいメディアもいとわず、ツイッターをフォローし、LINEでスタンブや絵文字を駆使しながら生徒のコーチングも行う。

生徒と対面で話し合う時には、多くの場合、お互いの間にノートかA4程度のコピー用紙を置く。そこに「言いたいこと」や「今の気持ち」や「浮かんだイメージ」などを文章や図で描き表すようにしている。そうして話すべきことを「見える化」し、「共有」すると、問題を客観的に考えられるようになる。そこから、「どうすればこの問題を解決できるだろうか？」という質問に入っていく。

「コミュニケーション」というと、対話や会話といった「空中戦」を想像しがちですが、私はむしろ、相手の感情や思いを「共有」するようなイメージのものとしてとらえています」

「コミュニケーションを「共有」ととらえる」と、コミュニケーションが現代の重要テーマとなっている理由も見えてくる。「共有」の反対概念は「占有」だ。自分さえ良ければ、自分さえ豊かであればと「競争」し、「占有」してきた時代から、「協同」し、「共有」することが必要な時代になったということではないか。

「そうだとしたら、とても良い時代になったのだと思います。私の高校時代は、3つの高校の生徒が集まっていたほど他者との交流が許されない時代でした。そのころに比べたら、今はいろいろなものを共有でき、分かち合える。とてもすばらしいことではないですか」

そんな時代に協同学習やアクティブラーニングが求められ、実践されていくことは自然な流れでもある。

鈴木先生は06年ごろから協同学習を取り入れた。それを見て、同僚のG先生もやり始めた。うまくできるようになりたくて、毎時間のようにお互いの授業を見せ合い、放課後に講評し合った。

「教師が協同学習を、協同的に学び合うことは、とっても楽しいということに気づきました。その1年間は、今も鮮明に思い出

す、宝物のような時間です」

生徒も成長した。鈴木先生によれば、協同学習や言語活動を行うと、生徒の「自己開示」する力が強まる。自己開示できると、自分や他者の苦しみ分かち合うこともできるようになる。そのようにして他者につながる力は、「生きる力」そのものだと言っている。

ただし、生徒の自己開示を伴う授業には、ルール設定も必要ということを感じておきたい。「守秘義務」や「話したくない」とは話さなくていい「パスしてもいい」といったルールを生徒に事前伝えておくほうがよいという。

「コミュニケーションを通じて、自己肯定的な人生を生きていく基盤ができるような、心の筋肉を鍛える授業ができればいいな」とも考えています。そのためにも、まずはわれわれ教師がつながることが重要です。「どうすれば課題を解決しているか」という思いを共有するところから、授業を中心にするすべての教育活動を展開していきたいと思います」

「コミュニケーションが増すとより良い進路選択につながる」

福岡県立朝倉高校定時制課程 教頭の宮原清先生は、前任校で適切に進路を考えられない生徒に対して、どんなサポートをすべきか悩んでいた。その時頭に浮かんだのが「コミュニケーション」の問題。進路

を考えることを「拒否」しているように見える生徒や、成績が良くないのに「超難関大を目指す」と言い出す生徒は、もしかしたら人とかかわりが少ないのではないか？ それが進路を現実的に考えられない原因ではないか？ 「コミュニケーションの量と質に問題の原点があるのではないかと考えるに至った。

そうして09年ごろから尺度の開発に着手した。試行錯誤を重ね、現在は3つの尺度を採用。「コミュニケーション効力感」「社会形成意識（はたらき感）」「進路不決断（進路選択）」である。

「コミュニケーション効力感」とは、「対人関係の自信や抵抗のなさ」を示すもので、「積極性」「親和性」「高社交性」からなる。社会形成意識とは、「他者のために何かしたい」という感覚や自ら課題解決する意欲」などを示すもので、「貢献性」「責任感」「生産的意識」からなる。進路不決断とは、「進路決定に関する不安や難しさ」などを示すもので、「進路決定不安」「進路選択葛藤」などから構成される。

12年11月に高校で調査を行い、112



福岡県立朝倉高校定時制課程
教頭
宮原 清先生

Communication skills

コミュニケーション能力を育む

■「コミュニケーションの自信」「はたらき感」「進路選択」に関するアンケート項目

ダウンロード可

【コミュニケーションの自信に関すること】

- ①新しく出会った人には自分の方から話しかける／②人に話しかけることが得意だ／③人と話をするのは苦手だ／④人と仲よくなる方法を知っている／⑤仲よくなりたいと思った人には、自分の方から声をかける／⑥つきあいにくそうに見える人であっても、仲よくなりたい／⑦新しく出会った人ともよい人間関係を築くことができると思う／⑧話が合わない人であっても、それなりに会話をすることができ／⑨あまり話したことがない人とも話してみたいと思う／⑩苦手なタイプの人とも、うまくつきあっていく自信がある／⑪つきあいにくそうに見える人に出会うと、距離をおきたくなる／⑫自分と合わないと思う人とは距離をおきたくなる／⑬苦手なタイプの人とは上手く話せないと思う／⑭話ができないような苦手なタイプの人はいない／⑮相性が悪いと感じた人とは会話を避ける

【はたらき感に関すること】

- ①人を喜ばせることが好きだ／②困った人を助けることに喜びを感じる／③困った人を見かけると手助けしてあげたく／④人の喜びを自分の喜びのように感じる／⑤子どもやお年寄りには優しくしたいと思う／⑥始めたことは何とか最後までやり遂げたい／⑦やり出したことを途中で投げ出すのは嫌いだ／⑧一度引き受けたら最後までやり遂げたい／⑨期限に間に合わないと思ったら、作業をやめてしまう／⑩人に頼まれたことでも、引き受けたい以上は最後までやるべきだと思う／⑪自分で課題を見つけて解決していくことが好きだ／⑫他人に決められたことだけをやるのではなく、自分で工夫したり改善することが好きだ／⑬達成できそうにない課題でも何とか達成できる方法を見つける努力をしたい／⑭決めたことがなとげられそうになくても、何とか達成できる方法を考えたい／⑮自分で問題点を見つけて解決し、物事を進めるのが好きだ

【進路選択に関すること】

- ①進路を決めることに対して不安がある／②自分が望む進路を決められるかどうか心配である／③どのようにして進路を決めれば良いかわからない／④具体的な進路をしぼりきれない(漠然としている)／⑤進路を決めることの難しさを感じる／⑥いろいろなことに興味があるので、どこを進路先にしたら良いかわからない／⑦魅力ある進路がたくさんある／⑧可能性のある進路がたくさんある／⑨いろいろと考えすぎて、自分に合う進路が決まらない／⑩他の人の意見がいろいろとあるので、自分に合う進路を決められない／⑪進路の問題は重要なことなので、誰かと相談したい／⑫今までも重大な問題は親などに相談してきたので、進路の問題でも相談したい／⑬自分ひとりでは何かを決めた経験が少ないので、進路について誰かと相談したい／⑭自分ひとりでは進路を決めにくいので、誰かと相談や話し合いをしてみたい／⑮自分に合う進路を教えてください／⑯希望する進路はあるが、それに親が反対するのではないかと／⑰思わぬことで希望する進路にいけないのではないかと考えてしまう／⑱進路について、友達と意見が違うのではないかと心配である／⑲社会の変化や景気の変動が、希望する進路に大きな影響を与えるのではないかと考えてしまう／⑳自分の能力では希望する進路にいけないのではないかと／㉑進路の決定は、運や偶然によって決まることが多い／㉒進路の決定は自分ひとりの力ではどうしようもない／㉓自分の努力や能力よりも、他からの影響で進路が決まることが多い／㉔自分だけでは、進路は決定できない／㉕進路のために積極的に努力するよりは、チャンスを待つ方がよい／㉖自分の興味や関心がよくわからない／㉗自分の能力や適性がよくわからない／㉘進路先での生活(学校生活や職業生活)のようすがよくわからない／㉙進路を決めるために必要な情報がない／㉚自分のことについても、進路先についても、よくわからない／㉛今まであまり進路のことを真剣に考えたことがない／㉜将来のことはわからないから、進路のことは考えたくない／㉝今の生活に満足しているので、できるならばこのままの生活を続けたい／㉞進学も就職もせずに、好きなことをしたい／㉟現在していること(趣味など)をなとげたいので、進学も就職もしたくない／㊱具体的な進路の希望はあるが、準備が十分でないので試験が心配である／㊲進路の希望は明確なのだが、試験が難しそうなので自信がない／㊳希望する進路先はあるが、準備が十分でないで、それが自分にとって最良かわからない／㊴進路に関して準備が不足しているので、希望する進路先において自分が十分に活躍できるかどうか不安である／㊵進路選択のための準備が十分ではなかったのではないかと

※上記に関するアンケート用紙は小誌サイトよりダウンロードできます。「コミュニケーション(コミュニケーション効力感尺度)」と「はたらき感(社会形成意識尺度)」の集計方法もダウンロードできます。「進路選択(進路不決定尺度)」の集計は、質問項目の1～5、6～10、…、36～40という5項目ずつを平均化してください。
※本テーマに関する宮原先生の研究論文もダウンロードできます。興味のある方は、ぜひご覧ください。

3人分のデータが集まった。先の3つの尺度、言い換えれば「コミュニケーションの自信」「はたらき感」「進路選択」の間には、明らかな相関があったという。
例えば、「コミュニケーションの自信」と「はたらき感」とは完全に相関関係にあり、人とのコミュニケーションに自信のある生徒は、他者のために何かをしたり、自ら課題解決をする意欲が高かった。
また、「コミュニケーションの自信」と「進路選択」との関係では、人と仲良くできる人ほど(親和性が高い)、進路選択に不安を抱かない(進路決定不安や進路障害

不安が低い)こともわかった。
「はたらき感」と「進路選択」については男女差があった。人の喜びを自分の喜びと感じる(貢献性が高い)男子は、目標が明確になりやすかった(進路障害不安が低い)が、女子は相関がなく、逆に貢献性の高い女子は、進路を決めたい意志は強いものの進路選択で悩む傾向があった(進路選択葛藤が高い)。これは現場での実感とも合致するという。
「女子の進路にまつわる不安は、私はブラスだととらえています。進路相談希求が高まり、いろんな人に相談し始めるなど進

路決定意欲が強くなっているからです。コミュニケーションに自信がないと、生徒は進路不安すら抱きません。ゆえに、進路に不安を抱いていない生徒であっても、決して安心してはいけないことだと思っています」
現在、このアンケート調査を使用する高校が福岡県や熊本県などで増えている。宮原先生は、できたら入学時が学年初めに調査を行い、個々の生徒やクラスの状態を把握し、それに合わせて対策を立てるようなことが望ましいのではないかと

いう。
例えば、「コミュニケーション効力感が低い」ようであれば、クラスにグループワークを取り入れたり、個別にカウンセリングすることも考えられる。
「特に低学年で成績が伸び悩んでいるような時、キャリア教育関連の行事を減らして補習を増やす前に、授業を含めたキャリア教育の質の検討が欠かせないと私は考えます。言語活動によるコミュニケーションを活性化させる活動を増やすことが進路決定意欲の上昇につながり、結果的に学習成績が上昇する可能性が高いと考えられるからです」